



心臓財団 季報

No.205

● 財団法人日本心臓財団 ●

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル 835 区-A

○ Tel 03-3201-0810 ○ Fax 03-3213-3920 ○ e-mail:info@jhf.or.jp ○ http://www.jhf.or.jp/

November 10, 2011

第9回日本心臓財団・アステラス・ファイザー 「動脈硬化 Update」研究助成対象研究者決定

日本心臓財団では、動脈硬化研究の一層の進展と少壮研究者の育成に努めるうえで、動脈硬化領域における研究を行う40歳未満の研究者に対する助成を実施しています。今回第9回の本事業に60名の応募があり、次の5名が助成対象者に決定しました。9月3日に開催された研究発表会で5題のうち上位3題の発表があり、それをもとに最優秀研究1題、優秀研究2題が選考され、残り2題が奨励研究に決定しました。

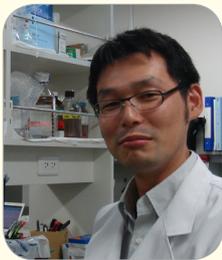
選考委員(敬称略)

委員長	横出 正之	京都大学医学部附属病院探索医療臨床部教授
委員 (五十音順)	秋下 雅弘	東京大学大学院医学系研究科加齢医学准教授
	石橋 俊	自治医科大学内分泌代謝学教授
	上田真喜子	大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学教授
	酒井 寿郎	東京大学先端科学技術研究センター教授
	堀内 久徳	東北大学加齢医学研究所基礎加齢研究分野教授
	山下 静也	大阪大学医学部附属病院循環器内科病院教授
	横手幸太郎	千葉大学大学院医学研究院細胞治療内科学教授



研究助成対象研究者

(順不同、敬称略、金額単位：万円)

氏名	所属	金額
 佐々木直人(36歳)	神戸大学大学院医学研究科循環器内科学	200
最優秀研究：動脈硬化形成における制御性T細胞の関与の解明と新規動脈硬化予防法・治療法の開発 動脈硬化症は、様々な免疫細胞が深く関与する慢性炎症性疾患であることが明らかになってきたが、直接的にその炎症を制御することによる治療法は、未だ臨床において確立されていない。近年、過剰な免疫応答を抑制する制御性T細胞/Regulatory T cell (Treg)が動脈硬化病変形成の抑制へ関与することが示唆されている。本研究において、薬剤投与によりTregを特異的に減少させることのできる遺伝子組換えマウスを用いて、動脈硬化症の発生・進展における内在性のTregの役割の検討および抑制機序の解明を行う。また、Tregを誘導・制御することによる新規の動脈硬化予防法・治療法を見出し、臨床応用に結びつけたい。		
 山本 隆史(33歳)	東京大学医学部附属病院臨床分子疫学講座	100
優秀研究：高血圧自然発症ラット(SHR)の遺伝解析により同定された新規メタボリックシンドローム関連遺伝子の機能解析 高血圧自然発症ラット(SHR)を用いた連鎖解析を行い、メタボリックシンドローム関連遺伝子の探索と機能解析を行っています。本研究ではノックアウトマウスなどの解析によりKAT-1、SLC22A18という遺伝子がそれぞれに高血圧や耐糖能異常、脂質代謝異常や肥満といった動脈硬化症の危険因子と強い関連を示すことを見出しました。今後は動脈硬化形成の過程におけるこれらの遺伝子の役割を検討することで、動脈硬化症の新たな診断や治療法の開発に繋がる可能性が期待されます。		

氏名	所属	金額
 柴田 玲(39歳)	名古屋大学大学院医学系研究科循環器内科学	100
優秀研究：新規アディポサイトカイン「オメンチン」の動脈硬化性疾患における役割		
メタボリック症候群や心血管病を含む生活習慣病は増加の一途をたどり、社会問題となっている。そこで、これら疾患の病態解明及び有効な治療法の確立は最重要課題である。脂肪細胞より分泌されるホルモン「オメンチン」は肥満者や糖尿病患者にて、その血中濃度が低値を示すことが報告されている。しかし、その生理機能に関しては、ほとんど解明されていない。本研究では、オメンチンのヒト動脈硬化性疾患における臨床的意義を解明し、かつ血管系制御機構とその分子メカニズムを明らかにする。		
 尾原 知行(37歳)	国立循環器病研究センター脳血管内科	30
奨励研究：都市型一般住民において慢性腎臓病(CKD)が頸動脈硬化病変に及ぼす影響		
近年、脳卒中発症の独立した危険因子として、CKDが注目を集めているが、CKDが脳卒中を発症させるメカニズムについては完全に明らかになっていない。CKDは頸動脈硬化病変を進展させるとの仮説のもと、本研究では、都市型一般住民約5000例のデータベースに基づく吹田研究を用いて、CKDと頸動脈硬化病変の関連を検討し、さらには血圧、血糖コントロールがこれらの関係に与える影響を調べる。この研究結果が脳卒中予防治療の発展に寄与できればと考えている。		
 塩山 渉(38歳)	大阪大学大学院医学系研究科循環器内科学	30
奨励研究：ドッキング蛋白質Gab1を介した抗動脈硬化作用の分子機構の解明		
近年、動脈硬化を背景とした虚血性心疾患や閉塞性動脈硬化症が増加している。動脈硬化は血管内皮機能障害を背景に発症するとされ、内皮機能障害の分子機構の解明は、新規の動脈硬化予防や治療法の開発において重要である。我々はドッキング蛋白質Gab1を内皮細胞で特異的に欠損させたマウスを解析し、Gab1が血管新生や内皮細胞機能維持、さらには抗動脈硬化作用に重要であることを見出した。Gab1を介したこれら一連のシグナルを詳細に検討し、動脈硬化発症抑制に関わる因子を同定することで、新規治療法の開発につながることを期待される。		

第16回日本心電学会学術奨励賞

平成23年9月18日から22日まで、ヒルトン福岡シーホーク(福岡)にて第28回日本心電学会学術集会(会長:加藤貴雄・日本医科大学内科学教授)が開催され、19日の総会において当財団が後援している第16回日本心電学会学術奨励賞の授賞式が行われました。

これは日本心電学会の会員で、心電学の進歩に寄与する顕著な研究を発表し、将来発展の期待される40歳未

満の研究者に贈られるものです。

今回は、李佩俐氏(鳥取大学大学院医学系研究科再生医療学分野)、吉田直樹氏(名古屋大学大学院医学系研究科循環器内科学)が最優秀賞に、久米治氏(大分大学医学部総合内科学第一講座)、牧元久樹氏(国立循環器病研究センター心臓血管内科不整脈科)が優秀賞に選ばれました。

募集のお知らせ

第25回日本心臓財団・バイエル薬品海外留学助成

1. 助成対象

心臓病・脳卒中・高血圧・動脈硬化症等の循環器領域の研究に携わる研究者

2. 助成金額

1件300万円とし原則として10件

3. 応募資格

次の事項のすべてに適合する者

- 初めての海外留学であること
- 40歳未満(1972年4月1日以降生まれ)で日本国籍を有すること
- 1年以上留学すること
- 留学先研究機関の責任者または受入者の承諾を得ていること
- 一定の研究業績を有すること
- 2012年4月1日～2013年3月31日の間に出発の予定であること

4. 応募期間

2011年10月1日～11月30日(消印有効)

第8回日本心臓財団・バルティス循環器分子細胞研究助成

1. 助成対象

循環器領域における分子細胞生物学的研究の進歩に著しい貢献が期待される研究者とする。研究対象は基礎あるいは臨床の別は問わない。

2. 助成金額

1件100万円を10件

3. 応募資格

- わが国に在住する者
- 年齢が40歳未満(2011年4月1日時点の年齢)
- 原則として臨床系教室およびそれに準ずる施設
- 原則として個人研究
- ただし、次の事項に該当する場合は応募できない
 - 過去に本研究の助成対象者となった者
 - 前年度の助成課題の連続応募
- 応募は一人一題とする

4. 応募期間

2011年12月1日～2012年1月31日(締切日必着)

第5回 日本心臓財団 Cardiac Rhythm Management 短期海外研修助成対象者決定 6名を選考

日本心臓財団では、わが国の循環器領域の臨床研究者が、欧州の基幹施設にて、電気生理学および関連分野において最先端の循環器臨床治療を経験することを目的とした短期海外研修助成を実施しています。

今回、不整脈および心不全等の植込み型デバイス療法に焦点をあてた Cardiac Rhythm Management 分野に従事する35歳から45歳までの研究者を対象に募集したところ、33名の応募があり、6名(五十音順・敬称略)

が助成対象者に選ばれました。

10月2日～9日まで8日間、イタリアの Cisanello 病院(ピサ)、Spedali Civili 病院(ブレーシア)での研修を実施し、下記の成果を得られたことを報告いたします。

委員長	下村 克朗	大阪回生病院顧問
委員	相澤 義房	立川メディカルセンター研究開発部長
(五十音順)	大江 透	心臓病センター榊原病院研究部長
敬称略)	中田八洲郎	前湘南東部クリニック院長

研修に参加して



青柳 秀史(38歳) 横浜市立みなと赤十字病院心臓病センター内科定助教

今回、リード抜去を中心に実際の手技を目の当たりにする貴重な機会をいただき、日本心臓財団をはじめ、多くの準備、研修にかかわったすべての方々に感謝いたします。イタリアでの経験豊かな施設において日本よりも勝る点が多くありました。これを吸収し、また、日本人の繊細かつ手先の器用な点は引き続きいかしつつ、日本の医療に携わっていると感じる研修でした。今回得た人脈は宝であり、大切にするとともに国際学会の場で交流し続ける良いきっかけとなりました。今後の日本の医療の発展に必ず役立てることができる、そう感じることで研修でありました。



有本 貴範(36歳) 山形大学医学部内科学第一講座助教

2008年に感銘を受けた論文があったが、今回の研修先に、著者がいることが分かり、大きな期待をもって参加した。講義と手術を交互に展開して頂き、手洗いで手術にも参加できた。質問することで、今まで抱えていた疑問点を解決することができた。「デバイス植込み時間を短縮できる」ことを実感して帰国した。早速当院のスタッフに、方法を伝達し、この研修で得た方法を採用している。全国の施設から集まった同僚の先生と議論する時間が十分にあったことも財産である。



下重 晋也(40歳) 札幌医科大学内科学第二講座助教

デバイス植込み症例の増加に伴い、感染などでリード抜去を要する症例が増加していくと思われるが、今回リード抜去の経験豊富な施設で研修する機会を得、異なる2つの手法を研修できたことは大変意義深いものであった。手技では注意点をしっかり守れば十分に施行可能であることを実感できた。また、日本での保険償還や当施設での設備や体制面で幾つかの改善すべき課題が明確になり、今後、具体的に準備を進める良いきっかけにもなったと思う。



野田 崇(40歳) 国立循環器病研究センター心臓血管内科不整脈部

不整脈治療のみならず心不全治療の分野において植込み型デバイスの重要性は高まっています。その使用頻度は増加していますが、同時に感染という合併症も増加しており、その対処としてはリードを含めたシステムの全抜去が必要です。今回見学した2施設はその症例数も多く、ヨーロッパの基幹病院でした。実際の手技の見学や講義による補足は非常に有益で、本年度から当施設でもリード抜去を開始しており、合併症の回避という点で非常に勉強になりました。また心臓再同期療法のための両室ペーシングシステムの植込みにも立ち会い、実践的な植込み方法も教えていただき、明日からの臨床現場で生かせるだろうと考えております。



山田 貴之(41歳) 医誠会病院心臓血管センター循環器内科部長

大変有意義な研修をさせて頂き、感謝しています。医療、医学という意味では共通ですが、日本とイタリアの社会事情や文化の違いから派生する手技や治療に対する考え方の違いを通して、患者さんにどのような医療を提供すればよいのか、改めて考えさせられました。特にデバイス感染に対する考え方が日本はかなり遅れている印象を受けましたので、微力ながら日本の医療の進歩に尽力したいと思います。また今回の研修で得られた知識や経験を今後の日々の臨床や研究に是非活用していきたいと思っております。



吉田健太郎(36歳) 筑波大学大学院人間総合科学研究科循環器内科講師

5日間という短期間ではあったが、プログラムが良く練られていて効率良く研修することができた。イタリアの先生方の英語はゆっくりで日本人にとって聞き取りやすく、手技の説明、講義の内容も良く理解できた。私たちの訪問に合わせて手術予定を組んでいただくのはとても御苦労だったと思う(特に感染リードの抜去)。3000以上のリードをMechanical sheathのみで抜去していることに対する自信と誇りがみなぎるBongiorni先生の姿は感動的であった。自分もそうなりたい。手技中も、会食中も我々を温かくもてなしてくださり、知識、技術の習得だけでなく、国際交流という意味においても実り多い研修であった。



書籍紹介
AED街角の奇跡
「勇気」が救った命の物語

監修：島崎修次
編：田中秀治
著：ダイヤモンド・ビジネス企画
ダイヤモンド社

2004年にAEDが一般市民でも使えるようになり、7年が経過しました。多くの医師や民間の努力により、AEDの普及は全国に拡がり、昨年末時点で32万台を超える設置数が報告されています。この本には、一般の人のAED使用によって救命された「命」のエピソードがいくつか紹介されています。

これらを読むと、AEDだけの効果ではなく、救助者の必死の心肺蘇生と助かってほしいと願う強い思いが奇跡を起こしたように思われてなりません。

AEDの普及とともに、多くの方々が心肺蘇生法を学び、大切な命が少しでも多く救われるよう活動している方々の願いもまた込められている本です。



書籍紹介
話を聞かない医師
思いが言えない患者

著：磯部光章
集英社新書

日本心臓財団発行「心臓」の編集委員でもある東京医科歯科大学循環器内科教授の磯部光章先生が、医師と患者の間に存在する根本的なコミュニケーションギャップが引き起こす現代医療の問題点について、日常診療のエピソードを交えながらわかりやすく書かれた本です。

生物学、統計学をもとに病気そのものを治療する医師(集会的、客観的)と、病気による生活や仕事の心配まで考えている患者(個人的、主観的)。この両者のギャップを埋めるためには、医師と患者お互いの考え方の違いを理解し、医学が発展途上の学問であることを認識した上で、ナラティブ・ベイスド・メディシンが重要といます。すなわち、病気は患者さんの人生のナラティブ(物語)の一部であると理解し、臨床に応用していくことを提案しています。

ご支援ありがとうございます

当財団へのご寄付

次の方からご寄付を頂戴しました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します。(2011年9月～10月)

匿名		5,000
匿名		6,000
匿名		9,666
タイコ エレクトロニクスジャパン合同会社様	川崎市	1,000,000
山村幸男 様	八王子市	100,000
匿名		100,000
株式会社東横イン様	東京都	100,000
匿名		30,000
匿名		10,000

当財団をご支援下さる方

本年度もご支援をいただいた方のご芳名を掲載します。(2011年9月～10月)

武者 春樹 様 橋本 敬太郎 様 河村慧四郎 様
石川 雄一 様 匿名 1名

心臓財団からのお願い

～ご寄付ならびに賛助会ご加入～

当財団が循環器疾患の予防・制圧事業を展開するうえで、その多くは寄付金ならびに賛助会費により支えられております。あなたのまわりの方にもぜひ呼びかけてください。

ご寄付はいくらでも受けさせていただいております。当財団は「特定公益増進法人」として認可を受けておりますので、税制上の優遇措置が講じられております。

ご支援いただける場合は、下記の口座をご利用ください。

郵便振替口座 **00140-3-173597**
宛て先 **財団法人日本心臓財団**



●お近くにお越しの節はお立ち寄り下さい。●